

高梁市における文化財保護の取り組み

森 宏之

ご紹介いただきました高梁市教育委員会の森と申します。簡単に自己紹介をさせていただきますと、私はもともと大阪の生まれですので、たまに言葉話す時に、丁寧な話し方がなかなか出てこないものでフランクというか、かたことしゃべりになりますと思いますがお許してください。

簡単な経歴ですが、皆さんに関連の深い岡山理科大学の卒業です。その当時の専攻は応用化学科、有機金属を専攻しておりました。その中で溶媒とかそういったことを大学ではやっておりましたが、あわせて文化財が腐食するのを止めていく保存のあり方というものがちょうど出てきた頃でした。当時、帯広畜産大学の中野先生が、脂肪酸分析の手法を石器に適用し、その石器に付着している油が何万年たっても腐らなく、その石器を使って解体した動物などが分かると言っておられました。ドイツなどで研究されている方法が日本に持ち込まれているような状況でした。一方、私は考古学研究会というサークル活動で発掘調査に参加したりしておりました。もう亡くなりましたが、その当時、鎌木先生という考古学の先生がおられました。その先生から、文化財の方面でも研究してみたらどうだと言われたことがありました。今からもう20年ぐらい前になります。

それから現在まで、いろいろな分析方法が開発され、発展してきています。文化財保存、保存工学とか、保存科学とかそういったものが、今まさに花開こうとしている時期であります。ここの大学はこういった事を勉強される皆さんが集まっておられるところで、こういう話をするのも何かの縁かなと思います。

大学卒業後は、県の教育委員会の出先機関の岡山県古代吉備文化財センターに3年間おりました。皆さんが現在通勤、通学の足にされています岡山自動車道と山陽自動車道とのジャンクションになっておりますが、倉敷インターチェンジから岡山ジャンクションと呼ばれるまでの区間の発掘調査を3年間かかってやっておりました。興味ある方はもうすでにご存知だろうと思いますが、津寺遺跡でありますとか、高塚遺跡という大きな遺跡に運良く巡り合わせました。また、岡山で中枢となる吉備の墓というのがあります。造山古墳や作山古墳など吉備路と呼ばれている地域周辺の発掘調査などに携わっておりました。

その後、縁ありまして高梁市に平成3年に参りまして、これが平成3年から現在平成16年で、13年目を迎えようとしています。その間、松山城を中心にして整備事業などに携わってきました。今日、「高梁市における文化財保護の取り組み」ということで発表させていただきます。あまり難しい話ではなく「高梁市ではこんなことをやっているんだよ」という紹介にとどまるかと思いますが、お耳をお貸しただけならと思います。午後から来られた方は大変申し訳ないのですが午前中に本年度、こちらの文化財総合研究センターの取り組みの中で吉田初三郎の絵の修復というものがあると伺いました。たまたま僕のパソコンの中に画像を持っており、メモ写真なのでそれほど画像は、よくないのですが、こんなものですということでご覧頂いたらと思います。

これが今高梁市の郷土資料館というところに展示・掲示しております吉田初三郎という当時のコピーライターぐらいに考えていただいた方がいいかも知れません。こういった鳥瞰図がここにあります

が、高梁市が中心ですが、実は瀬戸内から山陰まで全部描かれているのです。ここが高梁市になります。この辺が瀬戸内海で、ずっと回り込んできて、これが日本海になります。これと合わせて、前々回ぐらいに山内先生の発表の中でお話があったと思うのですが、サーカットカメラという180度回転式カメラで高梁の町を撮ったのがこのパノラマ写真です。これを対比して、今こういう形で郷土資料館にあります。これが話題になっている観光鳥瞰図なのです。お分かりいただけるでしょうか。

ここが岡山、ここが瀬戸内海になります。岡山からこの辺が倉敷、高梁へと続いています。こういう表現をすると悪いのですが、漫画チックに歪曲させることによって、日本海まで鳥瞰図として描写しています。日本中いろんなところでこの吉田初三郎が手がけている鳥瞰図があるようでして、数箇所吉田初三郎の作品が発見されています。実は、「季刊太陽」でしたか、そういった雑誌で特集されたこともありました。その吉田初三郎の作品で備中高梁というタイトルで、昭和9年ぐらいに書かれたというようなことが書かれているのですが、現物かどうかがわかっていないということがそこに書いてありましたので、これが修復されて展示できる様な状況になれば、こういったものに興味をもたれる方がかなりおられるので研究が進むのではないかと考えております。

ここからが本日の本題でございます。「高梁市における文化財保護の取り組み」ということで、さっき言いましたように紹介にとどまると思いますが、簡単にお話させていただきます。高梁市における文化財保護行政の特徴ですが、私が考えています高梁の特徴は、長い歴史的な要因と地形的な要因という二つの大きな要因がありまして、よその自治体に比べて特徴的な動きをしているのではないかなと思っています。その一つの歴史的な要因ですが古くは中国山脈沿いに物品が運搬されていたということを書いておりますが、これは高梁の場合、陣山遺跡という遺跡がありまして、そこから旧石器が見つかっております。その旧石器、槍先形尖頭器と呼ばれるものですが、瀬戸内式のものではなくて、播州で見られるような技術的特徴を持っていることが現在わかっております。ですから、この時代には、高梁という地域は瀬戸内山陰という南北の動きではなしに、山沿いに沿って東西の交流が行われていたということが、この陣山遺跡から一つの理由としてわかっていることです。そういう交流の特徴が高梁の時代背景にはあるといえます。次に、縄文時代も遺跡が数あるわけですが、弥生時代になって初めて南北の交流が行われるようになった証拠が宇治町にあります。宇治町というのは吹屋のちょうど玄関口にあたる場所なのですが、高梁市宇治町の本郷遺跡からは特殊器台と呼ばれるものが出土しております。これは考古学をある程度ご存知の方はすぐに「おっ、特殊器台が出てくるのか」と言われるぐらいの遺物なのです。古墳時代になって古墳の周りを数多く彩る埴輪がありますが、埴輪の祖形はこの特殊器台になるといわれております。奈良の箸墓古墳でありますとか、畿内への影響も古代吉備の特殊器台が変化していったといわれておりますので、そういったその当時の日本の中の文化としての最先端の技術で作られた特殊器台がすでにこの弥生時代において高梁の本郷にはもう入っているということでもあります。あくまで中心は先ほど私が紹介しました吉備路周辺です。古代の備中地域が吉備の中心地になって、この時代になって高梁に入っているということは南北のルートが改良していったことの裏返しだと言えるのではないかと考えています。

同様の答えになりますが、旧石器から縄文、弥生と来て、当然古墳時代もあるのですが、古墳時代、および古代につきましては、ほとんどわかっておりません。出土遺物もほとんどありません。7世紀後半から8世紀代の初頭に点在しているだけで、遺跡として言えるような遺跡は見つかっておりません。そのわかっていないということが一つの特徴だろうともいえます。

中世以降は守護地として発達します。これは遺跡からはまだ何も確実な資料は出ておりませんが、高梁に守護、および守護代がいたと思われまゝ。ということはどこかに守護地があって守護屋敷があるのだと思います。それはもうおそらく中世段階でこの城下町の外堀が出来上がっていて、今、高梁高校のところ、備中松山城の御根小屋跡と呼ばれる御殿だということは現時点の史跡でもあり、ご存知だろうと思いますが、おそらくあの下に私はその遺跡が眠っているんじゃないのかなと感じています。高梁の地域で言えばあそこが一等地になり、県指定となった史跡などは、一番上に出ている層から下は着目できない状況にあるので、中世段階の守護地として選択するならばあそこ以外には考えられないのではないのかなというのが現在の感想です。

そしてご存じのように、備中松山城を中心として「備中兵乱」というのが天正2年（1574）におこります。戦国時代末期になってこの地が戦地になります。「備中兵乱」では、毛利と織田の代理戦争がこの地で行われて、なおかつその時、「備中川分け」という備中の領土分けが行われて、戦国時代の図式が大きく変わります。そのうちの一つに選択されているのが高梁川ですが、高梁川を境として西が毛利領、東が織田領にというふうに分かれます。まさに高梁のこの地が、今朝鮮半島でいいます38度線です。そういう緊張、政治的な緊張の状態にずっとあったというようなことがいえます。これは後々の証拠になってくるのですが、実は備中松山城という城は、城主、あるいは城代と呼ばれるお城の守りをするトップの人間が全部で17氏42代もあります。通常のお城でしたら2氏あるいは3氏ぐらいが入ってくる場所ですが、これだけ数多くの武将、殿様が入ってくるお城も日本広しと言えども備中松山城ぐらいしかないのですが、ここでは全部で17氏42代変わります。これは何をあらわしているかというのは先ほど言いましたように、常にそこへ政治的緊張が走っているわけですので、長く政権の座につかされると、時によっては幕府の側に牙を向く可能性が考えられますので、短いサイクルでどんどん変えていく、しかも、譜代大名ばかりを配置していくということです。

最後の城代として板倉勝静を迎えますが、それは、先ほど言いましたように幕府の政治的緊張の地あるいは大事な地ということに思われているかも知れませんが、譜代大名、有力な譜代大名がゆえに、最後は幕府とともに殉じます。最後の松山藩主である板倉勝静というのは、当時の老中首座という役職を務めています。幕政のなかにあつて老中首座というのは、今で言うところの総理大臣に対する内閣官房長官ぐらいの役目をしておりますので、そのまま函館戦争まで持ち込んで、結局第三等という戦犯になります。それがゆえに、備中松山、松山という地名から高梁という地名変更も余儀なく新政府からさせられています。

逆にこのことはですね、長い歴史の中で見るとこのことが一つまた特徴になってくるといいますか、皆さんの大学の関連の順正短期大学なんかも、名前の元になっている順正寮でありますとか順正女学校、キリスト教の建学精神に基づいて高梁の地に根付いているわけですが、実はその朝敵になるということによって、とんでもない混乱が起こっているわけです。当時のいわゆる武士階級、支配者階級である人達は、結局朝敵になるからゆえに高梁の地を捨てて新天地へどんどん出て行くわけです。けれども、そうなることによって今まで支配していた支配層が急にいなくなると混乱が起こる、でその混乱を収めようとして、例えば有名な新島襄なんかも明治年間に高梁の地に入って、こういう混乱だからこそキリスト教の精神を広げなければならないとか、逆に受け入れやすいというような判断で布教活動が盛んになって、ある意味キリスト教が高梁に根付いたのも、こういった朝敵になっていた状況と深い関係があります。そのときの新島襄の奥さんにあてた手紙の中には、高梁のことを評価した

文が残っております。これは同志社大学の資料館に残っていますが、高梁のことを「いんぼうさかんにしてはなはだこまりたるものがある」というふうに書かれていますので、かなり混乱した状況だったのだらうと思います。そこのところに、「キリスト教を確立する必要があるのだ、しばらく私は帰るつもりはない」という決意を込めた手紙を奥さんに宛てております。それから見ても、高梁の地という朝敵はかなり後々に影響しているということがわかるかと思えます。

それと合わせて考えなければならないのが、地形的な要因だと私は思います。ここにいらっしゃる皆さんはよくわかると思いますけど、高梁は、山間の地です。吉備高原と呼ばれている中国山地に横たわる高原のちょうど西の端になります。こういう高原地帯であることと、高梁の今の住居のあるところと見比べていただきますと、高原地帯の山の上か、すり鉢状の谷の底かどちらかにしか住宅として住むところがないわけです。古い遺跡などは高原の上の松原町、宇治町などに出てきます。もうひとつは、中世以降に成立しました高梁川がつくった河岸段丘にのって、その谷底が平野になっています。今、市役所や駅がある市街地と呼ばれている部分は、中世以降の河岸段丘で、道路というか市街地は掘ると川砂です。中世の段階に街が形成されているというのがよくわかります。つまり、現在開発工事の多い市街地は、ほとんど遺跡包含地になっていません。ですから、逆に山の上の高原地帯、例えば土壌改良であったり、リゾート開発を行ったりしないと遺跡は出てきません。ほとんど遺跡が包含していないところはないという、高梁市の市街地を中心に示します。はっきりとはわかりづらいと思うのですが、薄々お分かりいただけるというのですが、ここ以外全部河岸段丘です。この高梁川が、東側の山沿いを通っていたのがだんだんと西へ移動することによって形成されていきます。ですから、地名とかも見ていただいたら、例えばこの山際に高梁市浜という地名もありますし、この隣は高梁市和田という地名があります。今は「のぎへん」の和田を書きますが、昔はおそらく「りん」、車輪の輪に田んぼの田で、輪田^{りんてん}というふうになっていただらうと思われまので、この辺はそういう川境だったということは地名からもお分かりになると思います。この長さが、だいたい南北で3kmになります。幅の一番広いところで、この幅がちょうど1km。実は高梁の人口集中の密度はこの1×3=3km²、この逆三角形のこの中が一番高いのです。土地の値段も高いです。学生さんの家賃が高いですね。これは仕方がないのです。これだけ狭いところにニーズが多いのです。後は、山の上に行けば土地は安いのです。そういうような理由からだと思えます。実は、この狭さというのが、実は高梁の歴史を考える上で非常に有効なというか非常に影響を与えているのです。

少し話が脱線しますが、備中松山城というお城、この黒く塗っているのが松山城です。備中松山城というと一般に近世のお城が残っているこの部分を備中松山城と思われているかも知れませんが、史跡備中松山城跡という文化庁の官報で定められている松山城というのは臥牛山の中に合計8箇所あります。これが全部史跡です。この中に近世の城郭のお城があつて、ここが小松山城と呼ばれ、大松山城、天神山跡・小松山・中太鼓・下太鼓、ここが御根小屋です。一番多いときには、戦国時代この中に21城が築かれていたといわれています。その中の本当はすごく小さなこの部分しか見ていないのです。それと先程、この狭さというのが非常に影響しているといいましたが、元々戦国時代までのお城というのは、戦乱のための、戦争のための施設であることは間違いありません。しかしそれが近世以降になると、お城の機能というのは大きく入れ変わります。その機能は三つ、殿様のその藩主の館であるところ、それと政治を行う政庁であるところ、そしてもうひとつに一番重要な役目なのですが、土地のシンボルという役目を持っています。この三つが近世以降のお城の役目だと思えます。

実はこの最後の土地のシンボルというのが一番重要な役割を果たしているわけで、今の人間もそうですが昔の人にとってはもっと、「おらが村の殿様は」という、「おらが村の殿様はこんなお城を作るのだ」という誇りがあります。領民を支配する、あるいは支配する側には「こんなものをつくるんだ。すごいだらう」という想いがあいまって、お城、当時の藩褻が成されているわけです。例えば、有名な話ですが駿府城をご存知でしょうか。静岡市にあるお城ですが、ここは家康の晩年の隠居地、隠居城ですが静岡市にあります。これは文書として残っておりますが、家康が駿府城に住んでいて、「信長も秀吉も成しえん全国統一をわしはしたんや。これだけの偉業を達成したんやから日本一じゃないか」ということで「日本一の富士よりも高い城をつくれ」と命じて、見事に駿府城は駿府の城下町から見たら、お城のほうが高くその向こうに富士山が低く見えたようです。「富士を見下ろす城に、おらが村の町の殿様は住んでいるんだ」、そういうプロパガンダ的な要素が城には実は求められていたのです。

話が長くなりましたけど、備中松山城、さっき言いましたように高梁の地をこれだけの城下町の面積しかないのに、この中でどうしても周りの山々よりも高い城を築くことは無理なわけです。逆にこの山々よりも低い城を築けば、おらが村の殿様の頭の上をみんなが見下ろしているということになるわけですので、これは避けなければならない。そうすると、多くの城が山城でありながら平地へ降りてくるといような城郭の流れなのですが、シンボルとしてのお城は山の上に残して、実際の機能だけは下へ下ろしてくるといことが行われて、備中松山城は、近世になっても山城というスタイルが残っていくわけです。それともうひとつは、大事な生産活動も城下町でもしなければならない、それだけ広大な面積をお城にとられることによって、生産活動をする地域も制限されてきますので、さっきの家賃の話でもありましたけど、これだけの面積しかないのだから藩側にもきちっと整理することによって有効に使うということが近世以降ずっとやられています。これが高梁市における歴史的な特徴点だろうと思います。私の紹介でも言いましたが、平成3年以降、私は、松山城の整備を中心に続けてきました。

ここでちょっと言い訳ですが、さっきも言いましたように高梁市というのは、実は開発工事も入らないし、開発工事が入ったところで市街地なので、発掘調査する必要がなく、中世以降に埋もれたこの平野部の開発しかないのに、あまり発掘調査はないのです。我々のような行政にいる文化財担当者の本来の一番の仕事は何かというと開発事業の調査です。さっきも言いましたように、私が県にいるときは高速道路をつくるので、高速道路の下の遺跡を保護するために発掘調査をする。市役所の職員の方は民間のマンションをつくったり、道路をつくったりするそこに遺跡があるのだったら、発掘調査をして記録保存しましょうというのが本来の行政の文化財担当者の仕事です。ところが、実は平成3年に入りましたが、さっき言ったような開発工事がない上に、開発工事があったところで遺跡対象地にはあたらない。ということは、僕は仕事がないのかということになりますが、実はそのときから着目しているのが、この史跡整理というものなのです。さっきも言いましたように高梁はずっと戦国時代以降、中世以降、城を中心とした城下町として形成されていますが、城に関する関心が高い。そこをよりよく、そこを中心とした街づくりをすることによって、文化圏を豊かにし、今ならよくあると思うのですが、文化の街づくりという、原始的な話ですけど街づくりにつなげていこうということで、史跡整理を続けてきました。もっと逆な言い方をすれば、これをしないと私には文化財の仕事はなかったと思っています。

これはちょっと皮肉交じりに言いますが、今岡山県にしても岡山市にしても、やはり日本中景気

が息切れしています。仕事がなくなってきたのです。開発工事もなくなっているのに、発掘調査するところがない彼らは今どうしているかというと、極端なことになりますと、京都市の文化財研究所が、和歌山まで仕事をもらいに行きます。大阪府の文化財センターが、三重まで仕事に行きます。そうしないと、もう発掘するところがないのです。ところが一方で公務員なので、仕事がないからといっても解雇できない。だから仕事をしなさいということで、全国に仕事を求めていくのです。

幸いにもこういう史跡整理が、幸か不幸か景気が悪くなる、逆に景気が悪いからこそこういうシンボリックなものをきちっと整備して、みんなのアイデンティティを高めて、文化的に豊かになって経済活動を盛んにしようというような動きがありますので、むしろ今まさに時を得てこういうことが盛んにやられて、鬼ノ城の整備であったり、松山城の瓦の復元であったり、色々なところで史跡整理が検討されてきています。

平成15年度の紹介ですが、平成14年、15年と何をしたかということ、松山城石垣の修理事業を行いました。修理という言葉が入っているのですが、実は修理のための準備事業というものです。平成14年、15年はどちらかという閑散期でありました。それまで天守の解体修理、本丸の復元整理などハード的に何億も使う整備をしていますので、これまでの調査資料を検討するというので、この2年間で石垣総合調査と悉皆調査をしています。一枚一枚調査するという、悉皆調査を行いまして、なおかつ、それらのデータベースを作成していつ今後の修理の予定を作る、素材を作ろうということをしました。早い話が、石垣のカルテ作りです。「どんな状況で、いつ頃積まれたもので、危険度はどうで……」というような調査を1年以上続けて、備中松山城全部で折れから折れまでを一面と捉えた時に486面確認しております。どんなことをするかといえばこんな感じですが、これ今の状況で言いますと、ここからここまでを1面と捉えるわけです。これで全部写真を撮ります。大きさも測ります。積まれ方についての特徴もとります。これくらいの簡単なものでも図も描きます。これでひとつひとつカルテをとっていきます。

続きまして、名勝頼久寺庭園を調査について説明します。備中松山城と同じ史跡ですが、高梁の頼久というところにある院ですが、国指定の名勝、指定になっています。ここの庭というのは非常に難しい、難しいというのはもちろん感想ですが、実は史跡備中松山城跡、史跡というのは、ようするにお城が一番隆盛していた時期に壊れてしまったのが現在の遺跡なわけです。ですから、それから時間は止まっているわけです。ところが名勝は何がやっかいかと言いますと、これは小堀遠州がつくったといわれていますが、小堀遠州がつくって今もなお生きているわけです。で、これが一番難しいというのは、石組みとか、庭園の地割など、小堀遠州がつくった無機質なものは、そのままだけど、植栽はどうかというと、植物はだんだんだんだん年々大きくなっていきます。毎日見ていると、赤ちゃんだったのがいつの間にか40代を過ぎてくる。それは、毎日見ているから気づかないのだけれど、では40歳のときの写真と0歳のときの写真を見比べれば明らかに違うと分かる。それなら、頼久寺の庭園の原型がどうだったかというのはもう現在は、一切分からない。これをもう一回いつかの時点の原型に戻してやらないと、違うものになっていくような話があって、実測図の作成、原形調査、視点場改修というこの3つの事業を行いました。このうち視点場改修というのは、頼久寺の庭園は座観式の庭園といわれているものです。座観式というのは、座るという字に、座布団の座に観る、観光バスの観、座観式庭園ということで、ひとつのところに座って見る庭園です。つまり視点場という特定の場所があるのです。それは、座敷であったり、座敷の外の縁側であったり、今回の場合は縁側の改修工事と

ということで、本当にここから見るのが一番正しいのかどうか、こんな調査なんかもやっております。

これが頼久寺庭園です。頼久寺庭園は……ちょっと見にくいのですが、庭園の後ろに愛宕山という山があるのですが、この愛宕山を借景にしています。借景というのは借りる景色と書くのですが、この景色を借りてこの庭園をつくることによって、これだけの小さい庭ですけど奥行きをずっと演出するという手法です。実は、現在植栽がかなり弱ってきています。それは老齢化していることもあるのですが、こういうところの色が変わってきているのが分かる。これが青海波を正面から捉えたところですけども、ここも枯れているのがお分かりになります。なぜこういうことが起きるかというのは、さっきもお話をしましたけれども、サツキ自身は年々大きくなっていく、でも庭の構成要素としてのサツキは、この高さならこの高さという一定の刈り込みをされなければいけないのです。例えば、サツキの幹が3cm時に、1mの高さで刈り込んでいてどうなるかという、どんどん大きくなってきてサツキの幹が5cmなった時には、5cm分の幹を満足させるだけの枝葉がなかったら、栄養不足になるわけです。こういう矛盾点が生じます。

ですから、幹の太さはどんどん太くなっているけど、高さはいつまでここで刈り揃えられるから弱ってくるわけです。その弱ってきたところに病気になったり、虫が入ったりすると、株がひとつ枯れてしまう。ところがこの株をひとつ取ってしまっても、こんな大きな庭という鉢の中でつくられている盆栽と同じ様なもので簡単に解決できません。実は、ここに崖というか石垣があります。サツキは石垣から一旦生えて出て、下からこうびゃっと出ているという懸崖づくりになっています。懸崖づくりのサツキを植え替えてこの形になるまでどうするか。そうすると、庭に生きているサツキを一本枝分けして、これの後継を片隅で育てて、いつでも移植できるような状況にしておかなければならないわけです。こういうのもひとつの文化財の修理の仕方です。

次に、今日は皆さん方に一番アピールしたかったのが赤羽稲荷古墳の整備事業です。実は赤羽稲荷古墳の整備事業というそれらしい名前をつけていますが、赤羽稲荷古墳というのは宅地造成中に偶然に発見された遺跡です。ですから、まさにこれらが行政内文化財担当者の仕事であります。開発地帯に遺跡があるということが分かった場合に、一番には「その遺跡を、その土地開発をきらめて他所でやってくれ、ここはそのまましておいてくれ」というのが一番理想的です。二番目は、「そうはいつでも業者さんだっけ元々うちが買ってしまった、計画は進んでいる、いろんな理由があって譲れません」。その場合どうするかというと、行政用語では記録保存というのですが、「それじゃあここにもう一回つくれるように、どうあったかというのをきちんと記録しましょう。記録上で保存しましょう」という、埋蔵文化財保護行政でよくある記録保存というものです。その記録保存というのは、皆さんがテレビでよく見ているような発掘調査です。発掘調査をしながら図面を取る、写真を撮る、映像を撮る、いろいろなことで記録として残していこうというのがこの文化財保護行政、埋蔵文化財保護行政の中心的な仕事です。

ところが、今回の場合は、一番の理想である、「開発工事は止めてください」ということに対して、なんとか応じていただいた。なおかつ、「その土地も市に寄付しますから、市がこれをきちっと活用して、正しく古墳を理解できるように、後世に伝えられるように市で整理してください」ということになりました。まさに、我々文化財保護行政の理想的という形になったのです！ 赤羽稲荷古墳のことがお分かりいただけだと思いますが、これが古墳の石棺の蓋石です。これが全部ガタガタとめくれあがって、石が出て来て、土器みたいなものが散っていますけれども、「先生なんや見てもらいたい」と

いう電話もらって、行って見た状況です。こういう……これが蓋開けた後ですね。ここからこっちに壊されてなかったのですが、蓋石を取ってやると、こういう……石の棺わかりますよね。^{ひつき}棺……石の棺、かんおけ。本来はこういうふうのにびている、この立てられた石と、ここちょっと見てもらえますか。ここ頭蓋（骨）ですけど、これ山内さんが見に来たときです。せっかく山内さんが来ておられるということで、発掘調査を開始しまして、さっきみたいな痕跡のものはっきり調べていくとどうなるかという、ここへもう一回蓋を戻してみると、さっき引かかっていた……こっちのここだけ残して周りを掘り進めて、どうなっているかいろいろ調査したわけですが、中身がこうやってこれもおそらくこのように立っていたんだらうと思います。この蓋石がずれて、そっちに……こういうような状況になっています。これがさっきのやつです。ちょっとのぞいたのですが、これは頭蓋の一部です。これは、上の方から撮っているのですが、これが枕石で、枕ですから頭をのせていたのです。

ここに玉石がずっと見えていると思うのですが、これ御棺の底に玉石を引いているのです。その上に遺体をのせています。今日、富岡先生がおられるので、こんなこと言うのも非常に恥ずかしいのですが、骨とか歯が出てくると大体年齢がわかります。歯のすり減りがどうか、骨盤が出てくると男女の性別、すねの骨が出てくると身長がわかるということです。ここから先の鑑定によるわけですが、歯が出てきましたので、何歳くらいのどんな人かというのが見当つきます。これは中でも一際大きかった石棺ですが、これは板式になっています。さっきは玉砂利。で、こういったものが残っているこのことは特筆に値します。さっき画面に映っていたのですが、これは粘土郭といいまして、粘土で皮膜している……ひつき石棺で蓋をしてその上を塞ぐカプセル状に粘土を皮膜することによって、湿気などが外部から進入するのをシャットアウトしていたので今でも残っています。周りを掘り進んでいくと、このような引き石と呼ばれる、古墳の周りに石を張った跡が出て来て「あっ、これがひとつの古墳なんだな」ということが理解できました。実は、墓棺というのは、今まで高梁で8棺確認されていましたが、5棺だけしかわかってなかったわけですね。ところが今回の調査で、これらを含めてこの中から全部で5棺出てきました。5棺出てくるのと同時に、この敷き石、古墳ですから盛土が全部なくなってわからなかったのですが、これが出てきたことによって、この石の傾きで盛り土の条件もわかるし、大きさもわかるというようなことで、まさに好例です。ここからが古墳の整備で駆け足で説明していきます。ひとつには、さっき出てきました御棺がこういうふうになるのですが、全部粘土郭で覆われています。ここは現物を見せてあげたいと思っています。ここにコンクリート擁壁で四角、つまり風呂桶状のものをつくって、後土を盛り返すという方法を今回取りました。これは古墳の石棺のすえ直しの状況ですが、先ほど出土したときにはもう壊れてベタベタ倒れていたのをもう一度起こしました。これについてももう一度言うておきますが、きちんと図面等をとった上で起こします。それから、これを戻してやるのと、この石自体には朱がついていたりいろんな当時の成分が残っていたりしますので、この石が今後風化しないように保護剤を塗って皮膜を作るわけですね。それを現場展示していく。

これがコンクリートを流しこんでいるところですが、この黄色の型枠の外が、ここちょっと見えますかね。こういう形でコンクリートで周りを防御して、防御というよりか仕切りをつくって、この中は当時のものを見せてやろうとしました。もちろんここに戻すわけですけど。後は、土を掘り返したり、当時のまま復元するというので、こういう形に仕上がっていますが、この中に五つの御棺があります。敷き石は当時のままで、土は透水性マサ土舗装といいます。字のごとく「水を通す」性質

もつマサ土の舗装ということです。これは、松山城で今までたたきと呼ばれていました。古城道を上がる時に使っている技術をこんなところに使っているわけです。雨は通すけれども舗装されていますという性質を持っている土です。これは、この古墳の中には、私が今回整理した部分には、排水施設は何にも設けていません。「雨が降ったらここに水が溜まるがな」とみんなから指摘されたのですが、絶対に溜まりませんと言って説得しましたが、案の定溜まりませんでした。なぜなら古墳自体の地下に、ここを見ていただいたらわかると思いますが、こういう傾斜とっています。また、この下の層でちゃんと排水機能働いています。今回この天井は空けたままですが、大降りしたらこの辺まで溜まることありますけど、次の日行ったら全部抜けています。まさにこの午前中の話ではないのですが、古代の人のきちとした排水技術っていうのは、今でも生きているわけです。これが注目するところです。みなさんの中で古墳を今まで見られたことのある人は、いろいろとイメージが違うと思うのですが、こちら側を芝にして、こちら側を土にしているというのが、ほとんど今までの整備例はそうだろうと思うのですが、みなさんは古墳には芝がいっぱい、あるいは樹木で覆われているというのがイメージとして持っておられると思いますが、あれは現在の姿がそういう草木で覆われている、あるいは芝で保護されている……例えば現在の土留め手法として、芝を使っているということであって、本来の姿はこういう石で拭かれた、ものすごく奇妙なもの、異様なものだったろうと思われま。神戸の五色塚古墳でありますとか、京都の伊勢の方にある古墳は、こういう元々の築造当時の古墳の姿に戻してやるという手法で整備されています。また、他の古墳整備でも、最近若干やられてきています。古墳というのはやっぱり芝張りで、土饅頭でというイメージがあると思いますが、本来の姿は、このコンクリートの擁壁の部分はちょっと除外して考えていただかなければなりません、こういう土を本当に叩いただけで、その上に石を張るとというのが本来の姿です。

今までの整備についていろいろ話させていただきましたが、本来の行政内担当者の仕事である調査も若干ですが行っています。その一つに町並みというものがあります。石火矢町という高梁市のふるさと村として指定を受けている武家屋敷の通りですが、その御屋敷が売りに出されている。だれでもかかれても買ってもらっていろんなものを建てられても困るので、市が買い上げました。市が買い上げて、なおかつそこに建築的な効果をもたせて、今年、すでに設計に入る準備をしています。やっぱり文化財と言うか、元々あったものは元のおりに戻してやろうというのが基本ですが、元の姿というのはどういう姿なのかというのは、こういう2色版の調査プリントで示されています。あわせて、萩原家住宅の現況調査、これも状況的には場所が違うだけでまったく同じです。萩原さんは、市に寄贈しますというような話をいただいています。

それとあわせてですが、臼井センター長が、岡山県にいたときに、そのご尽力で6億で購入した赤威大鎧という平安時代の国宝の甲冑です。この国宝を持っていたのが赤木氏という武将で居城にしていた丸山城というお城があります。このお城は高梁市の宇治町というところにあるのですが、今、色々な関係があって、市の方で整備してここを起爆剤にして町おこしをするためお城の調査をしています。

次に啓蒙事業と書いてありますが、高梁市における歴史がこうだとして、高梁市の歴史を知る講座を年に3回から4回の連続講座で、毎年2月から3月くらいに開いております。去年は、「中世から戦国時代の城郭構造と整理」ということをテーマにして、静岡県の教育委員会の方、それと中国城郭研究会の方、それと私ということでやっております。そして、社寺屋根保存会と呼ばれるのですが、草

葺屋根の技術保存会という文化庁の選定保存技術団体ですが、ようするに、古い茅葺であるとか、檜皮葺であるとか、瓦にしても、古い葺き方をできる職人さんが今いなくなっています。そういう技術を残そうということで、文化庁の選定保存技術というもの選ばれて、職人さんの組合ができております。松山城のそばの臥牛山国有林に檜皮の採取に行きました。檜皮というのはヒノキの皮です。ヒノキの皮をはいで屋根材にするのです。いい加減な檜皮の取り方をするとヒノキの木自体が傷んでしまって、次の檜皮がとれなくなるので、正しい取り方がある。その取り方について檜皮採取の現地にて技術研修を行いました。以上が平成16年度までの大体のご紹介です。

平成16年度は、合わせて先ほど言いました松山城記録保存事業は昨年度までカルテを作りましたので、このカルテを四百何十枚見比べて、一番危険な石垣から修理していきました。これも余談ですが、先ほど社寺屋根保存会のところでお話しましたが、昨年から全国城跡等石垣調査研究会というのが文化庁の指導の下にできています。これは、基本的なところは先程の社寺屋根保存会と目指すところが一緒です。今の職人さんは石積みもなかなか積めないのです。備中松山城の石積みはもっと積めないのです。なぜ積めないかというのは、ここでは強調しておきたいのですが、いい職人さんの基準が変わってきているのです。いい職人さんというのは、例えば備中松山城の石垣を積み直す、そのときに石を吊るのですが、「先生こんなとこユンボ（重機）が入らへんで石つられへんわ」と言われます。「こんなものユンボじゃなしに三又で組めよ」といっても、三又が組めない。だから、技術的に同じなのかもしれないけれど、今の土木工事の作業員さん達のいい職人の基準は、重機を上手に操れる人がいい職人の基準。重機が入らなく、使える道具が使えなかったらもうお手上げです。そういった意味でも伝統的な技術以外にも保存技術を選定していく必要があるのです。

おそらく過去と現在ということで、吉備国際大学の文化財修復学科さんがどのように携わっているか。そういうものの違いこそあれ、職人に対する考え方、いい職人の考え方というのが、同じ共通部分があるのかもしれませんが、昔ながらのことができない人がこういうような状況になっています。話が横道にそれますが、天守の解体修理をしている中でもですね、今の大工さんが技術的に劣っているのかというと、決して劣ってはいなく、素晴らしい大工さんもいると思いますが、いい道具がないと自分の仕事ができないというのはもっともなのですが、道具が変わってきているわけです。例えば、柱を1本とる、昔は、時間的な余裕とかいろんなことがありますので、葉っぱがついたまま山の中で乾燥させてその十分に乾燥させた乾燥材を、昔は縦引きのこぎりがないので、クサビで縦に割っていたわけです。クサビで縦に割るということは、繊維に沿って割れるわけですが、今は時間的にないので、あまり乾燥してない材を、製材所で縦にこうのこぎりで裂いてしまいます。ということは、繊維をまたいで縦に真っ直ぐ切ってしまうと、それが乾燥してくると弱ってくるというのは当たり前の話であって、昔の職人さんは、さっきも言いましたようにクサビで割るので、繊維に沿って割れる。それが乾燥したって同じように弱ってくるので、あまり縦のゆがみも少ないというようなことです。木材の生産の仕方も変わってきていて、道具の使い方も変わってきているということで、決してその職人さん自身が劣っているわけでもなく、また一方では先ほどの石垣の話ですが、もう重機がないとやっていけないという職人さんもういらっしゃいます。文化財だけでなく、個々の仕事に対して、「普段これがなかったらこうやろうか」という工夫が現在、足りなくなっていると思います。

平成16年度の史跡整備については、先ほど調査したことを、今年は実施に移すということです。特に実施したいのは、丸山城の整備基本計画であります。ここをきちっと整備してやることによって、

高梁の戦国時代の雰囲気なんかを体感できるひとつの文化ゾーンが宇治町に形成されるのだということです。16年度は、ここだけは言わせてください。啓蒙事業として限定講座をやるのですが、「近世城郭出現以前による備中山城」ということをテーマに、高梁市と真備町共催でやります。これは11月を中心に合計15時間講座を組み、今回のトリは静岡大学教授小和田さんをお願いしています。もし学生さん興味のあるようでしたらお越しいただきたいと思います。ようするにこれも作戦、仕掛けの一つであります。史跡整備をいろいろしていきたい、さっき言いました戦国のお城を整備したいと思ったら、担当者がいくら起案をあげてもだめです。市民運動として起こらなければ。そのために何をするのかというと、「高梁の戦国時代というのはこんなんだよ」、「高梁の戦国時代っていうのは凄かったんだ」ということで、気分を盛り上げるために何を知ってもらわなければならないか、その状況を知ってもらわなければならないと思います。前年に、15年度の高梁市の歴史文化講座にも「中世戦国時代の城郭の構造として松山に、近世城郭出現前夜」、これ名前変えています、「近世城郭出現前夜」ということは戦国時代のことです。戦国時代の山城、そして名前を変えています2年間にわたって講座をどんどん出し続けていって、ちょっと気分を盛り上げてやろうという狙いがここにあるということなんです。

最後に、もう一つお聞きいただきたいことがあります。文化財庭園保存技術者協議会研究事業についてはもう決定しております。8月の第4週の土日におこないます。この文化財庭園保存技術者協議会というのは、文化庁の選定保存技術団体です。この団体は、文化財庭園の庭師さん達の団体です。お庭を造るといっても植栽関係と石の配置ですが、サツキを刈り込む、石を配置する。そうやって日本庭園を復元するのですが、これもなかなか職人さんが少なくなってきました。この文化財庭園保存技術者協議会の会長さんは、平等院のお庭を管理されている職人さんです。二条城とか桂離宮とか金地院とか、ここの団体、協議会の構成メンバーは京都の出身です。ご存じのように京都は、伝統の都なので、そういった人達を高梁市の頼久寺に来てもらって、頼久寺ではさみをとってもらって、実際にその刈り込んでいる状態を皆さんに見ていただくと思っているわけです。これも、先程の写真でみた保存会の話であったり、文化財の保存技術関連の話であったりするのですが、「史跡」と「絵」の違いの中で、ここのセンターの修復事業を学生さんに見て頂いて勉強して頂く、まったく発想は同じだと思います。こういうことを16年度に計画しています。

「レストア式修復の町目指して」と書いてあるのですが、まさに私が今日指しているところはここです。昔は、「空間博物館構想」といいますか、高梁の町を頭に描いて見ていただいたらと思うのですが、高梁の一番の売りは備中松山城です。備中松山城が高梁総合博物館の展示の第一室であって、歴史展示をやっています。それから、御根小屋があって町並みがあって、その間には、県下でも有数の自然林が広がっている。「実は、総合博物館なんだよ」という話をずっと昔からしてきました。そういう位置づけを再確認したいと思っています。ところが最近になってちょっと状況が変わってまいりました。というのが、この文化財総合研究センターができた影響を受けているのだらうと思いますが、「レストア式修復の街」というのを考えています。私が何をしたいかというのは、ここにプロが寄ってほしいのです。プロに寄ってもらって、文化財の修復に携わるものは、「高梁を絶対に知っているはずや」という状況にまでしていきたいのです。我々が考古学やっているものは、奈良国立文化財研究所の「奈文研の研修」というのに参加します。埋蔵文化財、考古学を今からはじめようという人に、逆な言い方すると、「奈文研の研修に行ったことないの!？」というのが我々の世界ではそういうレベル

です。ですから、西洋絵画であれ東洋美術であれ、また草葺の職人であれ、いろんな人が「えっ？高梁行ったことないの！？」というような位置づけに持っていければ、私は、21世紀観光産業であったり、文化の街づくりであったりとかいろんなことが言われていますが、おのずとプロが口コミで宣伝してくれると思っています。それぐらい精神性の高い、今後を追求する街づくりと職人が寄っていけば、おそらく市民も変わってくると思っています。私は、この高梁市が、日本のこの小さい谷が「レストア式シリコンバレー」に。そういう横文字がいいのかどうかは別として、さっきも言いましたように、文化財をやるうって人は高梁って言う名前を、この字が読めない人はいないというところまで本当にいければ、おのずと街づくりはついてくるのではないかなと思っています。

本論文は、文部科学省学術フロンティア推進事業（平成15年度～平成19年度）による私学助成を得て行われた第5回研究会（平成16年2月21日 於 吉備国際大学11号館デジタルアーカイブ室）で発表されたものである。

ディスカッション

司会：それでは定刻になりましたので、質疑応答という感じで行きたいと思いますが、まずは今回の森さんのご発表で高梁における文化財保護の取り組みということですが、その中から個別で発表の事実確認等をございましたらどうぞ。はい、大原先生。

大原：赤羽稲荷古墳について、先ほどお話がありましたけど、それはどこですか。

森：高梁市の落合町阿部というところで、川の向こう側になります。備中高梁駅から山中鹿之助の墓のある方に向かって行って、その向こう側にイズミっていうショッピングがあるのですが、それをもう少し成羽寄りに行くと高梁病院というのがあります。そのすぐ横です。

司会：他に質問、事実確認に関して……。

白井：高梁の町が河岸段丘で、その昔は川が東に寄っていたから、「ワダ」と今おっしゃっていましたが、その「ワダ」は、港の「和田」なのか車の「輪田」なんでしょうか。

森：いえ、「のぎへん」の「和田」です。

白井：「のぎへん（禾）」の「和田」ですか。例えば「輪田」とか「揺輪田」ですと面白いですね。そういう皇位継承の新嘗祭用の米を作る主基田を意味する「ワダ」じゃないんですよね。

森：あの不勉強で申し訳ないですけど、普通の「和田」と思います。

白井：はい分かりました。どのあたりになりますか。

森：今はもう和田っていうところは田んぼが、吉備国際大学の駐車場になっています。

白井：「のぎへん」の和田という地名はいっぱいあって、ほとんどが海や川のそば、すなわち港だったんですね。

司会：でも川の側より海の側の地名が多いですね。和田って。

森：それはあんまり意識はしてないけど、例えば今津、津とかいうのは本来は海に使う……津山なんか、たくさん川港という意味で使っているんで、あんまり海川の区別なしに使っているのではないかと。

司会：それではですね、内容について質問ないしは今の森さんのご発表に対して意見等を含めたいと思いますが、どなたかございますでしょうか。はい。名前を言ってください。

テゲー：はい。吉備国際大学文化財学生4年生のテゲーといいます。最後に、古墳の絵が出てきて、修復した古墳の中の穴の壁はなぜコンクリートなんでしょうか。

森：古墳に箱式石棺が築かれる時に、土堀をします。古墳を造るときに掘り方というのを掘ってやって、石を据えて、遺骸を埋葬して、蓋を閉めて、なおかつそれから土を返してやります。これが古墳に埋葬されるという行為なのです。ところが、後世の色々な改変によって、この古墳の盛土が流れたりするわけです。

今回の場合は、宅地開発中に見つかりました。宅地開発中に見つかったという事は、盛土の部分はもうなくなって地面がフラットな状態のときに見つかったわけです。分かりますね？古墳をもう一回復元してやるためには、もとのように土を盛ってやらんといかんわけです。土を盛ってやると、古墳が発見された当初の状態のように見えなくなります。でも、多くの人がより理解しやすいように盛り土を盛った状態を見せてやりたい。古墳公園として。そうすると

きにこの掘り方部分を元に戻すために、コンクリートで壁を作ってやったらいい。これも整備手法の一つです。

このコンクリートの他には木でもよかったし、樹脂でもいいのですが、実際こういう整備をやる場合に一番気を使うのは何かというと安全です。そういう安全性の問題をクリアする。だから、コンクリートを使い、さらに背筋（RC）を入れている。鉄筋コンクリートなのです。

例えば、子供が入ったらいけないようにはなっていますが、何かの拍子に入った時に崩れてしまうという事があるので、一応、強度とか風化とか色々な事を考えて、今回、この盛土断面の土層の立ち上がりにはコンクリートを使いました。

さっきも言いましたように、この掘り方の外側にコンクリートが建てて、当時あった遺構は保護しています。それと、一番初めにはコンクリートをせずに、すり鉢状に開けてやろうと考えました。ここの土返すときに、もっと緩やかにすり鉢状の穴を開けてやって見せてやろうかなという事を考えたのですが、ここの古墳はさっき見てもらったように、14mの円墳の中に5つ石棺がある、そして、それをすり鉢状にすると、土をほとんど盛れないのです。

そういう事があって、土を盛ってやるためにこのコンクリートを建てたという事があります。それともう一つ、ちょっと蛇足ですけど、このコンクリートを立ち上げて、石棺の石材が風化しないように色んな塗料で保護してやる、薬剤を塗ってやったり、あるいは組み直してやったりという作業を、実際に私がこの中に入ってやったのですが、そうするとすごく狭くて仕事しづらいです。そういう事が分かった。分かったというか体感できた。

と、するならば、当時の人はコンクリートみたいなものを建てるわけではないから、単なる素掘りでこれだけの作業するのは非常に大変だっただろうなと思います。そういう風に考えたら、本当にここまでマウンドの高さがあったのかな、どうかと、不安になってきます。あるいはこの辺で、墳頂平坦面と呼ばれる盛土をやめていた可能性もあるんじゃないかなと、最近になって思ってます。ただ、今回復元は、こうやってきれいな土堀にしましたが、スライド見ていただきますと、ここの葺石しかマウンドに関する参考資料はないわけです。そうすると、この角度で盛ってやるしかないのです。ここでと留まるか、どうするか……。これは整理する側の意識が入ってしまいますので、今回は頑張っただけのまま盛り上げていきました。ただ、さっきも言いましたように、私自身が現在の技術を使ってここで作業するのもしんどいという事は、当時もっとしんどかったはずやから、恐らくこんなに高くはなかったなという話には出来るようになったんですけど。やってみてはじめて分かる事ってあります。

司会：他、質問ある方。

白井：白井です。葺石が削平されて残っている事例は少ない。だから、削平した場合は、本当初が土饅頭型だったのか平坦だったのかも分かりません。

森：分かりません。はい。

白井：遺跡の復元にはこうした問題は少なくありません。

森：それと高粱の、これも一つの地域的な特徴だと思うのですが、段々畑であるとか棚田とか見て頂いたら分かると思うのですが、石を張る風習があります。全部土留め石でやっている土地もあるでしょ。そうするとこういうようなやつが壊れて、有るという事は格好の石取り場なわけです。これだけしか残ってなかったの、そこまで全部敷かれてた可能性は十分に考えられま

す。

臼井：それが、一直線になっていたら元の状態に近いと思ったんですけど、さっき偶然削平され取り除かれたように、切り捨てられていたと言うから、元がどうだったか難しいですね。

森：逆に言うところから上、マウンドの上部が全然なかった可能性もあります。もっとフラットな墳頂平坦面だった可能性。でも、大型前方後円墳とかでそういう墳頂平坦面もありますけど、普通4m位の墳頂平坦面っていうのは聞いた事がないです。

臼井：今は張り石が無いわけですから、仕方ないですね。

森：ただもうちょっと古い段階の弥生時代の後半になったら、そういう「張り石」といわれる部分は、臼井先生がおっしゃったみたいになってる部分もあります。

司会：森さん。何世紀いつ頃というのをお願いします。

森：古墳時代、今のところ、今までの例からすると5世紀を想定しています。ご存知のように考古学というのは遺物から物事を判断します。遺物というのは出てきたものが何世紀かっていう事ですけど、今回は遺物がほとんど出土していないのです。今までの吉備から出ている5世紀の古墳とスタイルがあんまり変わらないので、5世紀と考えていますが……。ただし、私は今回、その年代観は否定しています。実際に掘った感覚では4世紀半まで、4世紀後半まで時代をあげてもいいのではないかな、と、思ってます。

それは一つにはさっき臼井先生が言われましたように、マウンドと葺石の問題。ほんまにマウンドの周辺部しかなかったのか、あるいは石取りで上方だけとられていたのかによってもものすごく変わってきます。さっきも言いました、マウンドがどこまであったのか、というのにも大きく影響してきますが、上方部は残っていないのでなんとも言えません。

司会：はい。高梁では非常に珍しい、先ほど森さんが空白状態と言われていたような時期、古墳時代の問題でした。ところで、古墳以外の対象について、森さんは色々な事をやられていますが、それらについて質問等ある方いらっしゃいませんか。

高木：文化財総合研究センターの研究員の高木です。レジュメのほう見せて頂いたんですけども、平成15年度の事業のところ、檜皮採取の事業があるんですけども、今まで全て森さんのおっしゃられたことにつながっていくんですけど、檜皮と今までの事業のつながりがよく分からないんですけど、これは何かあるのでしょうか。

森：檜皮葺研修と書いておりますけど、全国社寺屋根保存会と私どもの付き合いは何であるかというと、過去、瓦葺で一度勉強会をした事があります。実際備中松山城をはじめとして、城下町の建物はみんな瓦葺だと思いますが、ただ、いろんな個々の団体の中では、社寺仏閣とかの屋根修理もやっています。一方、檜皮葺は色んな葺き方があるのですが、研修を行う機会がなかった。そこで、臥牛山国有林に檜がある、という事で高梁に来てくれたわけです。高梁に檜皮葺の古い建物があるからわざわざ来たんだよという事ではないので、研修の内容はご自由にされたらいいという事にしました。

ただ、そういう古い技術を守っている団体が高梁に来る、という既成事実を作りたかったのです。

司会：他に質問ある方。鈴木先生いかがですか。

鈴木：文化財の鈴木です。頼久寺の庭園のことなのですが。私この間、たまたま訪れた時に一つ感じ

たのは、あそこの懸崖づくりのサツキの植え込みが、枯れた後に、新しい木をそこへ植え込むと何年かかるのでしょうか。

森：はい。断面図で描きますと、ここへこう石垣があってですね、ここへタッタッタッタと…ここらのやつは、ここへ葉っぱを黒で描きました。幹を青で描いたら、その懸崖を……こうですね。一生懸命に崖に……懸崖づくりっていう、こういう崖面からこういう枝を伸ばして、サツキとかツツジを伸ばしてつくるのが懸崖づくりです。さっきも言いましたように、ここにあるような懸崖づくりをしたサツキは売ってないので、今回はここへ木製の埋枘をつくってですね、埋枘からまっすぐこう立ち上げて、上を剪定してこういう形にしてつくったんですが、ここを木製にしているっていうのは、さっきの古墳の話にもちょっと出てるのかも分かりませんが、半永久的なものであったって、あくまで仮のものですよっていう無言のアピールです。これが普及するまでに小さい苗木をこの形に育てようという事を行っています。

白井：サツキというのは、三百年でも、それ以上でももっと生きていく、寿命というのはわからないくらいですけど、こう太くなった木に手当てをしないといかないと枯れていくというのは別の条件もあると思います。

森：枯れるというか弱くなる……。

白井：弱くなる、例えばそうなる前に主要な幹をバシッと枝を切ってやれば、そこから発芽しやすいのではないのでしょうか。

森：それももうちょっと形が整う前に、老齢化したやつは枯れてしまって、いつの時点かでまったく新しい苗木を植えてやる事は必要だったと思うのですが。もっと根本に、小堀遠州が造った時の庭に戻してやるのが果たして本当にいいのかっていう問題がひとつあるのです。今の頼久寺の庭園が、今の形で認知されている文化財としての姿をいきなり変えてしまうのが本当に正しいのかどうかという……。

白井：史跡の整理っていうのは、常にそういう問題に直面します。例えば津山の鶴山城には桜がいっぱいある、あれはそれなりにきれいだけど、あれほどなじんでいるものを元に戻すためには切るというのは勇気が要ります。あるいは植物というのは、それをつくった人が、植物が将来こうなるということは知っているわけで、ある程度土地にゆだねるといって、そういう発想があるわけです。これを無視してはいけない。守れというのもよくないし、元に戻すというのもあると思うのですが、現代人の感性がその時に問われるのです。

森：本当は今まで私が行政をやってきた中で、史跡の保存とか整備を考えてみると、城郭とか古墳とかというのは、壊れた状態で残っております。それを元の状態に戻すという事ですが、こいつはこのまま当初とは姿形を変えながらも名勝として生きていますので、その息の根を止めてやって元の姿に戻すって事は本当にいいのかどうか？で、この成長（変化）を見届けているが文化の過程の一つではないのでしょうか？その辺まだちょっと結論が出ない。

白井：その辺、意識しておくのと、しないのでは大きく違うのです。

森：それはさっきから話しているこういう内容をきちんと何かに記録していく事によって、複数の選択肢はあるのだけど、この場合はこっちのスタンスを採用し、一方は記録に止めておきますという事にしておけば問題ないかな、というふうに思っています。

司会：いわゆるオーセンティシティというような問題につながってくると思いますけど、例えば赤羽

稲荷古墳にせよ、あるいは先ほどちょっと話に出ました兵庫県の五色塚古墳にせよ、築造当時のある程度オリジナルの姿を復元すると、現在の状況から見ると極めて異質な取り残された状態になってしまうという事がありえるわけですね。それこそ三内丸山遺跡や吉野ヶ里遺跡が象徴しておりますが、何もなかった所に、ある日突然に巨大な構築物が建っているというのありました。

では、それが果たしてアカデミックに完全に正しいレベルで過去に忠実に復元されたものなのか、ある程度不完全な部分の存在があり、推定して復元せざるを得ないような状態であったのか。

例えば集客、人を集めるための象徴的・見世物的な存在になる事もあると思います。要するに、不完全な遺存状態であっても、復元しなければ人が集まらない。だけれどもその復元は、どこまで行ってもいいのか？これって非常に難しい線引きの問題になってしまうのですけれども、森さんは、そういった場合での、境界線の基準についてはどのようにお考えでしょうか？

森：いや。逆に境界線を持たないようにしているんです。持たないようにしていて、さっきも言いましたように、議論があって、保存や活用の道筋が何本もあって、その中のこれで選択しているっていう概要をきちっと明確に伝えてやれば、それはそれでいいのではないかと思います。

例えば昔のものを守り続けるのが今の人間、例えば私は高梁市役所の職員なので、市政にとってプラスならばそっちの事を選択しますし、昔の事を守り続けるのではなしに、今の状態にしておいて市民にプラスつながるのであればそっちを選択します。

自分自身の学問的判断でいけないところが市役所、というか行政内担当者のちょっとしんどいところです。しんどい所というか、そういった学問的判断がもてない所です。

こういう話というか、さっきの赤羽稲荷古墳にしても頼久寺にしても、例えばこちらの先生方ですね、文化財を修復するにあたって、例えば工程っていうのがありますよね。あるいは修理工の事ですとか。どの程度のものに基づいて組まれているか。歴史的な修理の過程はある程度記録していきます。

司会：そのあたりは東洋美術修復を専門にしている馬場先生、どのような状況ですか。

馬場：現在私たちが行う修復は現状保存修復です。従来の考えでは、オリジナル以外の補絹・補紙・補筆紙を全て除去する。そして新しく補絹・補紙を填る修復方針でした。最近では少し変わってきているようですが。

私が所属していた石川県立美術館内の修復工房では、後に入れられた補絹・補紙・補筆・加筆であっても時代的になじめば必ずしも除去しない修復方針でした。学芸員や修復技術者そして、作品の所有者とその都度話し合いを持ちながら修復が行われました。

仏画の場合などはちよくちよく問題になりますが、補筆を全部取り去ってしまうとすごく印象が違って見えます。今は補絹・補紙にはもとの色を入れずに地色補彩だけなので、仏画の尊厳性が薄れるような気がします。私なんかは仏画の芸術性が損なわれることがなければ補筆も全体のバランスを考えて残すことも必要かと思っています。仏画はそもそも宗教対象として拝むものですから、文化財修復においてそのところの考えも重視しても良いのではないかと思いますというのが私の考えです。

司会：他に質問はありますか。

岡野智博：高梁学園の岡野です。高梁の街並みなんですけど、例えば文化財という資産を活用するにあたって街づくりをどう行うか？街並み保存協議会とかですね、高梁川流域の色々な地域の文化とか、あるいは美術館とか博物館とか。森さんは教育委員会ですから、それらを纏めていくのにどういうテーブルをつくって話し合いを持つとお考えでしょうか？

それとも一つですね、実際に必要な労働力とか何を手伝っていけるかという具体的な仕事なのですが、例えばインターンシップのようにどういうかたちでどういう事をしてもらいたいのか？文化行政の中で協力出来る部分にはどういう仕事があるのか。具体的に行政の街づくりを進めていくと考えれば、いかがでしょうか？

森：簡単にお話しするとですね、お互いが負担になるような付き合い方っていうのは絶対にしんどいだけでメリットがないと思います。ですから、ニーズを的確に相手に伝えて、「それならやりますよ、それならもらいましょう」、そういう立場にならないと、なかなかお互いの関係がギクシャクしてしまうと思います。

正直な話、学生さんがおられる前で言うのも悪いのですが、例えば、インターンシップで何かしてもらっている間に、果たしてその分だけ仕事が軽減されているかっていうと、実際はそんな事はないわけですよ。考えて頂いたら分かるように、何人分か逆に負荷が増えている場合がある。だけど、それは長い目で見ていく中で、吉備国際大学の、あるいは学生さんの将来にとってプラスになる。そういう部分で解消していけるといいますし、高梁はまだまだ田舎というか、人間的な関係をもつごく大事にしていく人が沢山いる。そこで仕事出来るというのは、むしろ学生さんにもあまり求めてなくて、人懐っこく、人間関係をつくってくれる、いろんな意味で和気あいあいとやってくれるという関係を学生さんと職員、学生さんと町の人たちっていうのが、お互いに築いていけば、己ずと困ったときにはお願いをする事が出来るのでは無いでしょうか。

下宿の周りの近所のおじさんとかと、そういう付き合い方が出来るのかなって。また高梁市役所の職員が、学生さんなんか気軽に声かけられる関係にあるのかなっていうと、今はまだどっちもできてない。

司会：他には。

大原：大原です。最後に、街は丸ごと博物館というアイデア。森さんなんかは市役所にお勤めになって、実際にその市役所の中に、あるいは高梁市とのかかわりがものすごく強いので、どんな状態、例えば吉備国際大学にできた、あるいは文化財総合研究センターができたということに対して、市民に反応っていうのは何か。

森：お世辞抜きにですね、非常にいいです。それは市役所の中もそうですし、市民もそうですし、高梁の人はこういう歴史があるのもおぼろげながら知っていますし、いろんな意味で歴史的に苦境に立たされた時期もあるのを知っている事もあり、歴史とか文化に対して非常に神経質なところがある。確かに。

ただ、蓋を開けてみたらどうだという話なんですけど、例えばここでやっている仕事でも、松山城が立派になったよ、松山城がきれいになったよって事は、外に対してアピールする。そうしたら「あんた出来てから行った？」「まだ行ってないんです」そういうような感覚なんですかね。松山城自体の保存の歴史なんかも近代史的に面白いのですが、さっき朝敵になったって話があ

りましたが、昭和の初期になって、朝敵の街が城を戴くっていうのは、国はまだその段階でも気持ちが悪い。それで、修復に許可が出ない。何度か国に修理させてくれと、修理願い出してダメなんです。

昭和3年に二重櫓の解体修理があったんですが、そのときはご存知のように臥牛山国有林の中にある「火の見台兼造林人夫収容小屋」修理という事で届け出て、林野庁から許可をもらって二重櫓を建てました。で、今度昭和14~15年にはですね、天守の解体修理をやるんですけど、丁度日中戦争中で、太平洋戦争に突入していくプロパガンダの一つとして、当時の高梁町の単独事業として長期で行って、解体修理していくわけですね。そのときに、やっぱり単独だけでやっていますんで、お金がありません。勤労働員、学生を使って、今の例えば婦人会の幹部ぐらいの70代ぐらいの女性の方ですが、女学校時代には瓦を何枚も運んだという記憶を皆さんお持ちになって、事さら備中松山城を大事にしたという文化とか歴史に対して非常に興味があります。

そういう歴史がありますので、今回も大学が入って、高梁市が大きくなる事を非常に歓迎しています。

司会：歴史的な記憶っていうものは重要で、何らかの形でイメージというか残していったりとか、それを都市再生の糸口とする手法もあります。

はい。それでは他に……下山先生。

下山：そうですね。それぞれが突出して、ここの研究所もいろいろ突出して素晴らしいもの、全国的に誇れるものがあるというのはすごくよく分かるんですけど、後もう一つ森さんの役目としては、それをある程度情動的なものを整理して、発信していくということがあると思います。そういうことをやっていく部分でのコアを何か……。今日お話になった個別的なものはですね、これを束ねて出すっていうコアの部分に今、現在どのように取り組んでおられますか？

森：そうですね。史跡整備っていうのは、近年、ご存知のように、さっきの話の中でも触れましたけれども、高梁というのは都市部と違ってあまり開発事業が入ってこないという事があるのがひとつ。そしてもう一つには21世紀の文化を生かした街づくり、地域の特徴ある街づくりっていう事が言われていて、その中で史跡整備は非常に注目されてきてるんです。実は高梁だけの話でなくて、岡山県全体で。ご存知のように鬼ノ城があったり、津山城があったり、あるいは史跡整備ための予備調査として、彦崎貝塚の発掘調査があったりとか。開発は入らないけど調査はするぞっていう動きは、岡山全体ですごく動いています。

これも日本では岡山県しかないのですけれど、県内の史跡整備担当者だけで、岡山県史跡整備担当者情報連絡会っていうのが組織されて、それで12人位各自治体の担当者が集まっています。それで、今は行政的な方向しかアピール出来てはいません。

行政レベルでの実績の報告みたいな事はあります。さっき言いました岡山県のレベルと、今文化庁がやっております史跡整備のあり方に関する調査検討委員会っていうのがありますので、そういった所に出て行っております。強制的なものではないのですけれど。

市民に対しては、歴史の講座であるとか、冬季限定講座でありますとかと、後もう一つ、歴史文化講座っていうのを、ケーブルテレビでやっています。

それが繰り返し放映されているんで、皆さんだんだんそういった部分について詳しくなって

きてはおりますが、まだまだアピールは足らんなと思っています。箇条書き程度にはインターネットで情報公開もやっているんですけど、それ以上の事はやっていません。

付け足しているならば、私はこういった質問にかかってくるのか分かりませんが、吉備国際大学の文化財総合研究センターについては、今日の話の中で出てきた部分には若干分野が違ούνですけども、同じ文化財に携わっております。その視点から考えると、例えば、備中松山城の建物を解体修復しようとしたときに、写真を使った復元の問題とか、お城に関わる指図や、色んな事とかが出てくると思うんです。

お城自体には、襖絵があったとかどうかという事はないわけですけども、建物の中には色んなものがからんでいますし、動産文化財と不動産文化財、対象が違うだけで目指すところは多分一緒だと私自身は自負しております。そういった事が根底に立つようになって、行政サイドで今やっている事と、大学がやってる事がほんとにリンクしていけば、私はほうっておいても高梁の街が文化財の修復をコアとした“レストアシティ”になっていくのではないかな、というふうに思っています。

司会：では、そろそろ時間になりましたので、これで終わりにしたいと思います。森さんどうもありがとうございました。

(司会：山内 利秋)

本論文は、文部科学省学術フロンティア推進事業（平成15年度～平成19年度）による私学助成を得て行われた第5回研究会（平成16年4月24日 於 吉備国際大学11号館デジタルアーカイブ室）でディスカッションされたものである。

追 悼

元高梁教育委員会社会教育課文化財係森宏之氏は、平成16年7月13日に逝去されました。

同氏は、岡山理科大学工学部応用化学科をご卒業されたのち、岡山県文化財センターに勤務され、埋蔵考古学の分野で活躍されました。その後、高梁市教育委員会に移られ、さらに、城郭の歴史と文化財の活用に重点を置かれ、公私共々多忙な毎日を過ごされていました。職場にて、くも膜下出血で倒れられ、数日後、搬送先の病院にてご逝去されました。

同氏は、本文化財研究センターにおいても学術フロンティア委員会の一委員として、また、大学の文化財修復国際協力学科の学外実習先で学生をそれぞれご指導して頂き、同氏のご尽力により、本センターだけでなく本学も発展してきたわけであります。

ここに謹んで哀悼の意を表すとともに、ご冥福をお祈り致します。



2003年5月17日備中松山城登山にて

